

# 異言語間コミュニケーション方略としての 機械翻訳に対する「信頼」

——中国の日系企業に勤める日本人駐在員の語りから——

朱 藹 琳

## Abstract

This paper focuses on Japanese employees working as expatriate staff in Japanese companies in China, and investigates how they trust in machine translation. Semi-structured interviews were conducted with two Japanese expatriate staff, the language environment of one of them is Chinese, and the other one is Japanese. Both of them use machine translation in different ways and situations, and show different attitudes to machine translation, according to the social and cultural context of their business activity. This study attempts to consider machine translation as an agent in translation action, and analyze how it functions in it. As a result, both of the participants try to improve the accuracy of machine translation by pre-editing or post-editing, and these methods are learned from their everyday use of machine translation. By accumulating these experiences, including failure over time, trust relation is built gradually. Machine translation indeed plays an important role in the communication between Japanese expatriate staff and Chinese employees, but meanwhile, it is based on the relationship between Japanese and Chinese employees. However, the participants show concerns about the responsibility of (machine) translation, which still needs to be studied further.

**Keywords:** machine translation, business translation, Japanese-Chinese translation, trust in translation

## 一 はじめに

昨年、中国語の授業で「取代（取って代わる）」という単語を教える際、単語練習として

「你觉得机器翻译能取代人的翻译吗？（機械翻訳は人間の翻訳に取って代わることができると思いますか）」と学生に尋ねると、ほぼ全員ができる（我觉得机器翻译能取代人的翻译）と答えた。もちろん、最も言いやすい言葉で答えた可能性もあるが、これはある程度機械翻訳が有用であるという考え方が浸透していることを示しているだろう。機械による自動翻訳はかつて、いい加減で変な訳語を産出するため当てにならないと思われていたが、2010年代に入ってニューラルネットワークを用いた機械翻訳による訳文の精度が上がり、さらにスマートフォンを用いた自動翻訳サービスが普及するにつれ、世間の認識も徐々に変化してきている。しかしながら実際、異文化間・異言語間コミュニケーションの環境に置かれる人々は、どのように機械翻訳を使用し、そしてどれほど機械翻訳を信頼しているのだろうか。本稿は、中国の日系企業に勤務している日本人駐在員の語りから、機械翻訳に対する信頼、および機械翻訳がどのような役割を果たすかを考察することを試みる。

## 二 先行研究

### 2.1 機械翻訳の発展と普及

機械翻訳は、1947年にウィーバー（W. Weaver）が提案した後、諸国において機械翻訳のプロジェクトが行われ始めた（黒橋 2022）。言語の規則によって ST<sup>1)</sup>の構文を解析し TT に構造的変換を行う規則ベースの機械翻訳（rules-based machine translation）から、過去の翻訳用例に基づく用例機械翻訳（example-based machine translation）、統計的な考え方に基づく統計的機械翻訳（statistical machine translation）といったコーパスに基づく翻訳（corpus-based machine translation）に発展してきたが、「多くの言語対では不自然な翻訳が多く、実用レベルとは言えない状況」であった。しかし、ニューラル機械翻訳が登場したことでこうした問題は解決した（ibid.）。ニューラル機械翻訳も「コーパスに基づく翻訳の一種であるが」、対訳コーパスから自動的に学習できる点ではこれまでの機械翻訳と比べて優れているため、最初に提案された2014年から数年経った後すでに大きな精度向上を実現した（ibid.）。2016年11月から Google が提供するウェブ翻訳サービスの日英翻訳もこの方式に置き換わり、「一般の人々にもその高い性能が広く知られることとなった」（ibid.）。日本語と中国語間について、田畑（2017）は2017年時点 Google 翻訳、百度翻訳などの主流の機械翻訳サービスにおける日中間の翻訳はニューラル機械翻訳に切り替わる過渡期であると推定し、特許翻訳の分野における技術用語の翻訳精度を検証した。その結果、以前の翻訳の結果と異なって「急速に進化している模様」を示した<sup>2)</sup>。

とはいえ、翻訳サービスを提供する側にとって機械翻訳による訳文をそのまま使用することはできず、「ポストエディット」という作業が必要となる。ポストエディットとは、一度

翻訳したい原文を機械翻訳に翻訳させ、その後人間翻訳者が後編集して納品できる程度に仕上げる作業を指す。山田（2022）は、ポストエディットを使用する翻訳会社、および翻訳者の態度を調査して論じた。こうした作業の仕組みに切り替わるならば、翻訳者の需要が大幅に減るのではないかと危機感を抱く翻訳会社や翻訳者もいたが、機械翻訳を使った翻訳作業は「対訳コーパスから単語の配列を学習しているだけなので、そのようなシステムが出してきた翻訳結果を、プロの翻訳者が修正をするほうが、かえって労力が大きくなってしまふ」ことを指摘した（ibid.）。また、ポストエディットの単価は翻訳より劣っており、翻訳者は引き受けたがらない傾向にあるが、それでもポストエディットを採用している翻訳会社も実際に存在するのである。

こうした先行研究から分かるように、現在の機械翻訳は以前と比べて精度が向上しており、翻訳サービスを提供する側も使用実績があるようになってきているが、依然として翻訳会社と翻訳者は懸念を抱いている。ただ、翻訳通訳のニーズが高い多国籍企業のビジネス場面においては、機械翻訳は一つのコミュニケーション手段にはなるであろう。

## 2.2 ビジネス場面における異言語間コミュニケーション方略

異なる言語を話す人々は、どのようにコミュニケーションするのか。木村（2021）はヨーロッパに焦点を当てて議論を行い、代表的な異言語間コミュニケーションの方略を6つにまとめ、その特徴を「使用可能性」、「学習負担」、「対等性（公平性）」、「創造性（柔軟性）」、「対象接近」、「直接性」の6つの面で比較した。この調査と考察は特定の地域にフォーカスしたものであるが、ほかの地域と言語にも適用できる部分があると考えられるため、先行研究として取り上げる。方略①は、英語のような国際共通語の使用である。特にヨーロッパでは英語の普及率が高いため使用可能性は高く、英語で直接話すことができる。ただ、習得するには時間がかかり、差が出やすくなる。方略②は、「単一の当事者言語」であり、例えば筆者（中国語母語話者）が日本の友人（日本語母語話者）に話す際に日本語を使用するパターンである。直接話すことができ心的距離は近いが、自分の考え方を外国語で伝えるために多くの学習時間を要し、さらに対等性が劣っている点が挙げられる。方略③は、翻訳通訳（人間と機械を含む）を用いる「言語仲介」である。互いに自言語でコミュニケーションできる点で（原則的に）最も対等性が維持できる方略であり、また学習しなくてもいいという点で学習負担はかからないが、翻訳通訳を介するため6つの方略の中で唯一間接的なコミュニケーションになる。方略④はエスペラントで、方略①の英語使用と類似するが、使い手は多くなく散在しているのが現状であり、実用性が比較的低い。方略⑤は「自言語不使用」で、例えば筆者が日本で知り合ったドイツの友人（ドイツ語母語話者）と話す際に、互いの母語ではないが、熟達度の高い共通言語である日本語で話すパターンである。方略①と比べ

てシチュエーションに限定される方略だが、方略②と比べてより対等なコミュニケーション関係であると見なされる。最後の方略⑥は「受容的多言語使用」で、「それぞれが自言語を用いても、相手の使う言語を理解できるだけの異言語能力」(ibid.)でやりとりする方式を指す。こうした方略には「基本的に相手の言語を理解する受容的な言語能力を必要とする」(ibid.)ため学習負担が比較的低く、また対等かつ直接的なコミュニケーションを確保できる。ただし、使用できる場面が極めて限られるであろう。木村(2021)は6つの方略を比較し考察したが、こうした比較は「定式化・一般化」するものではなく、「どれかの手段が特に並外れて優れた特性を持っているということとはできない」とした。そして、言語の多様性と言語間の対等性を尊重しつつ、使用場面などによってそれぞれの方略を組み合わせ、互いに長所と短所を補うことでコミュニケーションを図ることを主張した(ibid.)。

本稿は中国に進出する日系企業を調査のフィールドとするため、ビジネス場面における異言語間コミュニケーション方略について述べておきたい。朱(2022)は中国の日系企業における社内通訳者を対象とした研究であり、アンケート調査および半構造的インタビュー調査によるデータから、一部の中国の日系企業におけるコミュニケーションの実態をまとめている。この調査に限って言うと、木村(2021)が挙げた方略③「言語仲介」、つまり通訳者を介するコミュニケーションが最も多く見られた。その次は方略②「単一の当事者言語」である。日本語が話せる中国人従業員が日本人従業員と日本語で話したり、通訳者が自身の担当業務について日本人従業員と日本語で話したり、日本人従業員が中国語で中国人従業員と話したりするパターンが挙げられるが、実際、中国語が話せる日本人従業員が少なかったため、「単一の当事者言語」が日本語になるケースが圧倒的に多かった。また、通訳者が不在の場合は、日本人従業員と中国人従業員が直接自分の知っている日本語や中国語、さらに英語の単語を使用したり、漢字で書いたり、身振り手振りを交えたりするコミュニケーション方略も用いるなどして、方略⑥に類似する手段をとっている。

本稿は、特に方略③に注目し、通訳者ではなく機械翻訳を用いるコミュニケーション方略に焦点を当てる。どのように機械翻訳を用いてコミュニケーションを図るのか、ほかにどのような方略でその不備を補うのかという点も併せて明らかにする。村上(2023)は、この新しい時代における異言語間のコミュニケーションを、外国語能力によるコミュニケーションと機械翻訳によるコミュニケーションに大きく分け、そしてそれぞれの不備を互いに補う形として、例えば機械翻訳による不備を自身の外国語知識で補完したり、自身の外国語能力の不足を機械翻訳でカバーしたりするコミュニケーション方式を挙げた。この考え方に沿って、グローバル時代におけるコミュニケーション力を鍛えるために、外国語能力および相手の社会や文化に関する知識のほか、機械翻訳を使用するための知識と技能が求められると述

べた。

多様な文化・言語背景を持つ人々との交流が増える今日、上記の6つの方略からさらに新たな方略が加わることもあれば、2つ以上の方略を組み合わせることも想定できる。ただ、機械翻訳を使用した言語仲介が増加することは確実であろう。こうした背景において、翻訳通訳の枠組みで、機械翻訳をコミュニケーション過程の一つの行為主体として考えるとき、機械翻訳という「仲介者」に対する信頼は重要視される必要があると考えられる。

### 2.3 翻訳通訳行為における「信頼」

本稿は機械翻訳を、翻訳通訳行為を遂行する一つの行為主体として捉えることを試み、こうした考え方に基づいて機械翻訳に対する信頼について考察する。そのため、翻訳通訳行為における信頼について述べておく。ここで述べる翻訳通訳行為は、単に言語レベルで言葉を転換するのみならず、一つの社会的な行為として見なす。言い換えれば翻訳通訳者は、1人の行為者として翻訳通訳の過程に関わるすべての参加者と関係しながら、互いに影響しあっている。本稿で論じる「信頼」は、翻訳研究において記述的アプローチの重要な概念「翻訳規範」を提起したチェスタマンの「価値概念」に基づく。Chesterman (1997) は、価値は規範を支配するものであると主張するため、まずは翻訳規範について述べる。翻訳規範は、「あるコミュニティで共有される一般的な価値観及び考え方——何が正しくて何が誤りなのか、何が適切で何が不適切か——を特定の状況に適応する使用可能な作業指示にしたもの」(Toury 1995) と定義付けており、すなわち、ある特定の社会的文脈で翻訳者がよく採用する選択肢の集合であると見なされ、その選択肢は、「共通の標準的慣行である」(ピム 2010)。よって、翻訳規範は、翻訳者がいかに行動するか、どのように訳語を選定するかなど意思決定に影響を与える一要素である。トゥーリーの考え方に沿って、Chesterman (1997) は4種類の翻訳規範、すなわち、「期待規範」、「関係規範」、「責任規範」、「コミュニケーション規範」を提起した。

前述のように、規範はあらかじめ規定したルールではなく、多くの翻訳者が取りがちな行動を記述した集合であり、特定の社会で共有される一種の意識でもある。もちろん、翻訳者の行動に影響を与えるのは規範だけではないが、チェスタマンは記述的アプローチの枠組みにおいてさらに「価値」の概念を取り入れた。そして「価値概念は規範概念より前にあると考えられ、この考え方では、規範は価値観に支配される」(Chesterman 1997) と述べ、さらに翻訳者の行動に影響する要素を探求した。上述の4つの規範を支配する価値は、「明快」(期待規範)、「真実」(関係規範)、「信頼」(責任規範)、「理解」(コミュニケーション規範)である。本稿は主に「信頼」について論じるため、信頼の価値のみ詳述する。

チェスタマンは、価値概念における信頼は、言うまでもなく翻訳依頼者や読者の翻訳者に

対する信頼を指すが、逆の方向で翻訳者は、STを翻訳すること自体が「価値のあることだ」という確信もなくはならず、また読者が「翻訳を信用して読んでくれるだろうと信じる」ことも必要であると主張する (Chesterman 1997)。つまり「翻訳における信頼は双方向に作用」し、翻訳者と読者、翻訳依頼者、出版社、原著者といった「翻訳行為のほかの当事者」が互いに信頼し合うことが必要である (ibid.)。翻訳者にフォーカスして見ると、まず、翻訳者が翻訳者として見なされる前提の一つは、「私は翻訳者として、これを翻訳する権利を有している」と翻訳者自身および翻訳行為のほかの当事者が信じることである (ibid.)。そして、「翻訳者として生き残るために、専門職としても個人としても、関連するすべての当事者に信頼」を置き、彼らと「信頼関係を築き、維持していけるように仕事」しなければならない (ibid.)。そのための一つ的手段として、チェスタマンは翻訳者の「説明責任」を挙げた。これは、翻訳者は適切な時に適切な言葉を述べる責任であり、例えば自分が原文を「変更したり、追加したり省略したりしたことについて説明する責任」を指す。こうした信頼関係を築いた上で、翻訳者は「信頼されている状況が変わるのを阻止する」必要があるとチェスタマンは補足した (ibid.)。

こうしてチェスタマンは信頼という価値概念を責任と結びつけ、翻訳者の行動や翻訳者と翻訳過程におけるほかの当事者間との関係性を説明した。本稿は信頼に焦点を当てるため、ほかの価値概念については詳述していないが、現実の翻訳行為ははるかに複雑であり、どちらかの価値が危うくなったり、複数の価値が矛盾したり、翻訳者がどの価値に優先権を与えるのかの選択に迫られたりする場面も多く見られる。したがって、実際の翻訳通訳現場において、規範概念や価値概念がいかに翻訳通訳者に影響を与えるのかはケースごとに異なり、特定の社会や文化において論じなければならない。

このように価値概念と翻訳者の行動を結びつけた研究として朱 (2022) が挙げられる。朱 (2022) は、中国の日系企業に勤務する社内通訳者がどのようにコミュニケーション摩擦場面に関与するかをケース・スタディーで分析し、価値概念に基づいて通訳者の倫理を考察した。ここでは、信頼に関する内容のみ抜き出して説明する。例えば、日中の従業員間の激しい口論の原因を通訳者に責任転嫁する事例では、通訳者がそれに対して反論する行動は、失われそうな信頼を取り戻すことを目的としている。つまり、通訳者が私は通訳する権利を有しているということを信じてもらうための努力である (ibid.)。またほかの事例では、通訳者が、日中の従業員の会話において、文化の違いや背景に関する知識不足を補足説明したり、会社の意思決定に関わる判断に提言したりするコミュニケーションをサポートする行動を取っている。通訳者としてこうした行動が取れるのは、通訳者と通訳過程に関わる当事者との間に深い信頼関係が築かれていることに基づいている。しかしながら、チェスタマンは信頼を失わないようにする手段として「可視になる」ことを主張し、通訳者自身の介入につ

いてその理由を釈明することを挙げたものの、中国の日系企業において、すべての通訳者がこうした説明ができるわけではない。通訳者は元発話から何も変えずに正確に訳せばいいといった価値観が支配的な企業や職場において、通訳者は「信頼を維持するために不可視になることを選んでいる」のである (ibid.)。結論から述べると、朱 (2022) における事例に限ってみれば、通訳者は4つの価値のうち、「信頼の価値に最も優先権を与えていることを示した」(ibid.)。ただし、通訳者が置かれる環境によって、信頼の価値に関する解釈が異なるのである。また、この研究の対象である通訳者は社内通訳者であり、つまり通訳者と同時に社員でもあるため、所属する企業の風土やルールなどにも左右され、企業の一員として信頼関係を築いたり維持したりする社員としての機能を果たすことも無視できない。

以上の先行研究を踏まえ、本稿は中国の日系企業に勤務している日本人駐在員の語りから、どのように機械翻訳を使用しているのか、そして、その信頼性についてどう考えているのかについて調査し、ビジネス場面のコミュニケーションにおける機械翻訳の役割について考察することを試みる。

### 三 中国の日系企業における日本人駐在員の語り

本稿は中国の日系企業における日本人駐在員が機械翻訳をどのように使用しているのか、どれほど信頼しているのかを明らかにすることを目的とするため、半構造的インタビューを調査の手法とする。上述の先行研究から、機械翻訳に対する態度が曖昧であったり複雑であったりすることが想定されるため、量的調査より、質的調査が適切だと考えられる。本稿は現時点で行った調査データをまとめ、分析と考察を行う。

調査は2024年3月に実施した。筆者の知り合いや友人の紹介などを通して調査協力者を募集し、4名が調査への協力に応じてくれることになった。現時点ではうち2名のみインタビューを行った。インタビューを実施する前に研究と調査の趣旨およびプライバシー保護など諸事項を記載した「調査協力依頼書」を送付し、同意を得た上で日時を決めてWeb会議システム (Zoom) を用いてインタビューを実施した。本稿の調査対象である2名の調査協力者のプロフィールを以下に示す。

表1 調査協力者のプロフィール (調査実施時点)

協力者 <sup>3)</sup>	年齢	業界	駐在年数
JPA 氏	40代	メーカー	約1年
JPB 氏	30代	商社	約3年

インタビューにおいては主に以下の5つのテーマを中心に語ってもらった。調査協力者が語った内容に対して、筆者が質問を追加することもあった。

- (1) 中国での駐在・出張の状況（期間、回数など）。
- (2) 会社では、専任の翻訳通訳者がいますか。翻訳・通訳が必要になる時、基本的にその人が対応してくれますか。
- (3) 機械翻訳、または生成 AI を使った翻訳を使ったことがありますか。  
どのようなアプリ／ソフトを使っていますか。
- (4) どのような状況で機械翻訳、または生成 AI を使っていますか。その時は、順調にコミュニケーションできましたか。また、その機械翻訳、または生成 AI の質はどうでしたか。
- (5) ビジネスシーンの翻訳通訳において、人間による翻訳通訳と比べて、機械翻訳の利点と不足点についてどう思いますか。

本章においては、「機械翻訳を使う場面と形式」、「機械翻訳に対する信頼性」という2つのカテゴリーに沿って2名の語りから内容を抽出する。本稿は主に「機械翻訳に対する信頼性」を考察するため、このカテゴリーでは調査協力者の語りがあるがままに引用する。一方で、「機械翻訳を使う場面と形式」の部分は考察のための背景説明として位置付け、調査協力者の語りから要点をまとめて要約するが、そのまま引用する場合は引用符を用いる。

### 3.1 機械翻訳を使う場面と形式

JPA 氏が置かれる言語環境は主に中国語である。JPA 氏が赴任している会社には、日本語が話せる中国人従業員がいるものの、「自分の業務がありながら、日本語が話せる」だけで、専任の通訳者はいない。同じ部署には、日本語が話せる人は「1人だけ。あと6人ほど、ほぼしゃべれないんです [中略] 少しだけ分かるのは1人」ということで、そのほかに日本語が全く分からない工場の作業員とコミュニケーションをとる必要もあり、JPA 氏はほぼ自力で中国人従業員とコミュニケーションをとらなければならない状況である。また、中国語の学習について JPA 氏は「なんか少しでも分かったら楽しいかな。せっかく長期間中国にいるので、少しでも、そういうところが分かればいいかなと思って」、「2ヶ月ぐらい前から勉強するようになりました」と積極的な姿勢を見せたが、仕事で使えるレベルまでにはまだ不十分であるため、JPA 氏は機械翻訳を「使わざるを得ない」と語った。

JPA 氏が使用する機械翻訳サービスは、会社から支給されている iPhone に入った翻訳アプリである。使用する場面について、JPA 氏は「現場に行って、普通に作業してる子に、これを使わずにこっちを使つてとか」という場面を例として挙げたほか、同じ部署内の中国人社員との会話にも使うと補足した。つまりこういった「一対一で、短い会話で伝える時に」

機械翻訳を使用している。使用方法については、JPA氏は日本語で文字を入力し、翻訳された中国語を相手に見せたり、アプリ内のスピーカーボタンを押して聞かせたりしている。それに対して中国人従業員は多くの場合、スマートフォンに向かって中国語で話し、翻訳された日本語をJPA氏に見せる方法をとっている。対面のコミュニケーションであるが、スマートフォンの自動翻訳アプリを介し、「お互いに自分が持っているアプリを見せ合う」という独特な情景を表している。翻訳アプリにも音声入力ができる会話モードが備えてあるが、なぜそれを使わないのかを尋ねると、JPA氏は「工場のなかで使うことが多いので、うるさい、周りが」と理由を述べた。さらに、対面のコミュニケーション以外にJPA氏は中国語で届いたメールにも機械翻訳を使用している。同じアプリのカメラ機能を使って撮影すると、画面上で日本語に翻訳されるということである。

一方、JPB氏は中国に赴任しているが、「みんな日本語でしゃべってくれるので、社内のスタッフたちは、基本、日本語の会話が多い」と話し、言語環境は主に日本語であることを示した。JPB氏が勤めているのは商社であり、中国人社員を採用する際は日本語の能力が採用基準の1つとなっている。JPA氏と同様に、会社には専任の翻訳通訳者はおらず、日本語を話せる社員が通訳を担っているが、「通訳をするのも当たり前で、(それ以外に)ちゃんと仕事をする」という様子を語った。しかし、全ての社員が日本語を話せるとはいえ、「レベル差がすごいあるんですけど、片言の人もいれば、上手い人もいますね」という状況であるため、日本語の環境に置かれているといっても何も考えずに日本語が使えるわけではないことを示した。さらに、JPB氏は大学時代にすでに中国語を習得しており、当時の中国語検定「漢語水平考試」の最上級(HSK6級)の資格を取得しているため、「日常会話ならしゃべれますよ [中略] 6, 7割ぐらい、こっちのローカルの人と話ができますね」と語り、社内の中国人従業員とも、取引先の中国人社員とも、基本的に直接的なコミュニケーションをとることが可能である。

このように日本語の環境に置かれ、さらに中国語での意思疎通ができるJPB氏も、機械翻訳を使用している。JPB氏が勤める企業は、「T-tact AN-ZIN®」という有料の自動翻訳サービス<sup>4)</sup>を利用している。JPB氏は、「これを導入したのはたぶん一、二年前ぐらいだと思います。それを知ってから使うようにしました」と語り、主に「ファイル翻訳」の機能を使用している。中国語の書類をそのままアップロードして日本語を選択すると、日本語で書類が出力されるという機能である。逆に、中国人従業員に何かを説明する際に、このサービスを使って日本語の資料を中国語に翻訳して読ませるといった指示も出しており、機械翻訳を使用することを薦めている。このようにJPB氏は主に文書の翻訳において機械翻訳を使用しているが、普段のコミュニケーションにはまったく使わない状況である。

これまで述べた2名の調査協力者の機械翻訳を使う場面と形式について下記の表で示す。

表2 2名の調査協力者の機械翻訳使用実態の比較

協力者	言語環境	中国語のレベル	使用場面	利用サービス	形式	必要度
JPA氏	主に中国語	入門	一対一の短い会話	iPhoneの翻訳アプリ(無料)	文字→文字(中国側:音声→文字)	高い(毎日)
JPB氏	主に日本語	上級	文書の翻訳	T-tact AN-ZIN®(有料・会社契約)	文字→文字	やや低い

上記の表で示したように、JPA氏とJPB氏は中国語のレベルが異なるという要素もあるが、言語環境、および会社が提供できる翻訳ツールの条件が大きく異なり、それによって機械翻訳を使用する場面と必要度に差があることが分かった。次節では具体的に2名が機械翻訳を使う際にどのような工夫をしているのか、また機械翻訳への信頼度についてどのように考えているのかを述べる。

### 3.2 機械翻訳に対する信頼性

本節では、JPA氏とJPB氏2名のインタビューデータから機械翻訳の使用における信頼に関連する語りを抽出して、語った内容および語り方を分析する。抽出した語りは、調査協力者(A/B)+語り(N)+番号で表記し、「」でそのまま記載する。引用符の中にある括弧内の内容は、理解を助けるために筆者が追加した補足である。番号はインタビューにおいて言及する前後順で付ける。下線を引いた部分は筆者による強調である。

#### 3.2.1 JPA氏：機械翻訳に対する信頼の「蓄積」

前節で述べたように、JPA氏はまだ中国語を学び始めた段階であり、また、随時に通訳してくれる人がいないため、自力で日本語の分からない中国人とコミュニケーションをとることが多い。したがって、機械翻訳を使用することが必要不可欠である。この点に関して、JPA氏はインタビューにおいて何度も言及した。

AN1:「通訳者もないから自分で頑張るしかないですね。」

AN2:「話せない子なら、ほぼ言葉では伝わらないので、もちろん身振り手振りは入ってきます。だけど、そこでも限界があるので、携帯のアプリ、そこを使わざるを得ない。」

AN3:「これしか頼るものがない」

AN4:「これしかない」

「～ざるを得ない」、「～しかない」という表現を使うことから分かるように、JPA氏は状況に迫られ、機械翻訳を使用するほかに選択肢がない実情を語った。日本語が話せる社員

に通訳してもらおう場面もあるが、多くの場合、異言語間コミュニケーションの方略は機械翻訳による言語仲介の一択しかない状況である。上記の4つの語りのうち、AN3とAN4では「～しかない」という表現を使った語りのみ抜粋したが、AN3とAN4を述べる前に、機械翻訳および翻訳通訳を介するコミュニケーションに対する不安についてJPA氏は語っている。

AN3a:「今まで（機械翻訳を）使っている感じでは、見せて、翻訳されたものを見せたり、聞いてもらったりして、伝わるんですけど、伝わってると思うんですけど、これが本当に正しく翻訳された文章なのかとかが、こっちが、まあだいたい見れば漢字で分かるけど、本当にこれ正しい、正しく翻訳されてるか分かんなくて、だからそういう点では、若干不安なところもあって。これしか頼るものがないけど。」

AN4a:「これが本当に正しいのかと。でもこれを言い出したら、たぶん、通訳さんも、これを中国語で伝えてくださいと言って、それを話した時に、これがきちんと、ニュアンスなり、まあニュアンスはなかなか難しいかもしれないけど、言葉の意味として、伝わっているかどうか、こちらは理解できないから、なので、そういうところで、翻訳って、翻訳アプリって大丈夫かな、と思いながら使っています。これしかない。」

この2つの語りから、JPA氏は機械翻訳ないし人間による翻訳通訳を介したコミュニケーションをとる際、最も不安になる点は「正しさ」であることを示した。これはおそらく、機械であれ人間であれ、翻訳サービスを使う人々が共通に思うことであろう。JPA氏が語った「正しさ」とは何なのか。AN3aでは、JPA氏は「伝わっていると思う」という点で機械翻訳を肯定的に捉えているが、「正しさ」に関する不安を示した。よって、ここで求められている「正しさ」とは「伝わる」ことを超えた範疇なのではないかと推察する。また、AN4aでは「ニュアンスなり」、「言葉の意味として伝わっているかどうか」と述べたように、おそらく、自分が発した言葉の意味およびニュアンスを正しく再現することではないかと推測できる。

JPA氏は機械翻訳に対して不安を抱えながら、ひたすらその仲介だけに頼るのではなく、機械翻訳を使用する際の「正しさ」を確保するために、テキストを産出する際の工夫についても語った。

AN5:「分かりやすくて、あと、きちんとした日本語（を入力する）。できるだけ。じゃないと変なふうに翻訳されると困るなと思って。」

AN6:「例えば、『私』、『あなた』をちゃんと入れたりとか。昔一緒に仕事をしていた通訳者さんが言ってた言葉、ずっと頭に残ってるんですよ。日本語は、英語とか中国語とかもそうで、日本語は「私」とか、「あなた」とか、ほとんど言わ

ないんですよね。だけど、中国語は絶対、ほぼ言いますよね。ただ日本語は、「私」とか「あなた」とか、「彼」とか言わないので、それが誰に向かって話している言葉なのか分からないと、それを覚えて。確かにな、中国語、周りみんな話してる内容とか、あと中国語勉強の授業の時に、やっぱ絶対「我」とか言うよねと思って。」

AN7：「例えば『こうした方がいいんじゃない?』っていう話じゃなくて、『こうしてください』って言ったりとか、そういうふうに、明確に、できるだけ明確に伝わるように、というのは考えて文章を打ってますね。」

AN8：「専門用語は本当にどのように変換されるか分からないので、できるだけ専門用語は使わないように、ちょっと考えて文章を打ってますね。」

前章では、機械翻訳と後編集（ポストエディット）を組み合わせた実用例を取り上げたが、JPA 氏はその逆で、前編集（プレエディット）で工夫し、機械翻訳による訳文の「正しさ」を図っている。具体的な工夫として、まず AN5 で「分かりやすくて」、「きちんとした日本語」を挙げた。それだけではなく、AN6 と AN7 から、日本語と中国語の特徴の違いおよび中国語の慣習を意識していることが分かる。AN6 では、JPA 氏はかつて「一緒に仕事をしていた通訳者さん」から学んだ日本語と中国語の違いに関する知識や自分が中国語の授業や周りから学んだ知識を活用し、日本語では「私」、「あなた」、「彼」を言うことは不自然だが、「正しく翻訳する」ためにあえて追加しているという工夫が語られた。AN7 では、JPA 氏は日本語における曖昧性を回避し、指示を出す際に直接的な言い方を好む中国語の慣習に近づけるように努めているということが語られている。また、機械翻訳による専門用語の訳出には懸念があるため、使わないようにしている。こうして JPA 氏は機械翻訳の「正しさ」を図りながら「考えて文章を打って」、機械翻訳の「正しさ」を検証している。

AN9：「翻訳した時に、中国語がパッパッと出てきて、文字が、これは絶対違うだろうって思ったら、一回消します。消してもう一回違う言葉で翻訳しますね。」

AN10：「全然、『うん？ 何言ってるの?』みたいな顔をされたりするのはないかな。」

AN11：「一応こっちが聞きたいこと、これに対して、回答をくれるので、全然間違っ  
てはないだろうなと思って。」

JPA 氏は検証方法を 2 つ挙げた。一つは、AN9 で述べたように、機械翻訳による中国語の訳文の漢字を確認することである。これは漢字を使う日本と中国ならではの手段であり、同じ漢字でも意味が異なることが多いにしても、翻訳を介するコミュニケーションにおいては安心感を得る一つの手段と言えるであろう。JPA 氏はこの方法で検証して、違うかもしれないと推測したら、前述のように再度前編集で工夫するように努める。もう一つの方法は AN10 と AN11 で述べたように、相手の中国人従業員のリアクションおよび返答から判定す

るという方法である。この検証方法について語る際、JPA氏は「だろう」、「かな」、「だろうな」のような、やや不確定性を含めた表現を用いている。このことから、JPA氏は機械翻訳が介在することの不安は完全には解消しがたいと考えていることが窺えるのではないだろうか。

JPA氏は注意深くテキストを産出し、機械翻訳による「正しさ」を検証することで機械翻訳を使う不安を和らげている。一方、中国人従業員側はそこまで気にせず機械翻訳を使用して、その結果失敗しており、そのことについてインタビューで以下のように語っている。

AN12：「自分はできるだけ短くて分かりやすい（日本語の）文章を翻訳に入れるんだけど、向こうが、相手がすごい長い（中国語の）文章なんですよ。たぶん翻訳機の方が追いつかないかなと思って。」

AN13：「（中国人従業員は音声で入力するため、）しゃべればいいだけなので、楽にばあっと話すように、そうすると、翻訳する内容も増えてくる。（ただ、）それが正しい中国語かどうかというところもあって、で、翻訳された日本語もやっぱり、変わった、不思議な日本語になったりとかって感じるのかなって、思いながらコミュニケーションを取ってる。」

AN14：「（自分の聞いたことに対して中国人従業員が発した）その答えが、中国語から日本語になった時に、とても分かりづらい（日本語の）文章が見せられて、これが何が言いたいだろうと言って、すごい考えて、こういうことなのかな、っていう、その（翻訳された日本語の）文章から、自分の中で考えて理解する。」

AN15：「これ何を言ってるのかな、何が言いたいのかな、じっとその（翻訳された日本語の）文章を見てると、（中国人従業員はおそらく）これ伝わってないな、変な日本語（に翻訳された）なのかな、変な日本語になっちゃったのかなと察してくれて、もう一回違う言葉で翻訳して見せてくれる。」

AN12では、JPA氏は「長い文章」を入力すると自動翻訳の「正しさ」が減ってしまうことを再認識し、「正しい」翻訳をするために「短くて分かりやすい文章」が必要であるという認識を強化している。AN13も同様にその認識を表したと同時に、AN14とともに、機械翻訳による日本語の訳文を「考えて」「理解する」重要性を明らかにした。さらにAN15では、中国人従業員側もJPA氏と同様に、機械翻訳を読んだ相手のリアクションから「察して」正確性を検証していることが分かった。表2にも示したが、JPA氏の機械翻訳の使用場面が基本的に「一対一の短い会話」に限られているのは、長い文章の機械翻訳の精度に対する不信感に由来するのではないかと推察される。以下の語りもその補足である。

AN16：「重要な会議だと、文章が長くなったりするので、それが本当にきちんと伝わ

るかどうかも分からない。」

このように JPA 氏は機械翻訳を介してコミュニケーションする経験を一年間蓄積し、「正しさ」を確保するための方略として「考えて」テキストを入力したり、コンテキストなどに基づいて訳文を「考えて」理解したりする方法を身につけた。そしてこのようなコミュニケーションにおいて大きな失敗を経験することなく、少しずつ機械翻訳に対する「信頼」を蓄積している。

AN17:「まあ使っても問題ないのかなって、最近はそうやって思ってますけど。」

上記のように、機械翻訳に対する信頼を積み増やすことを示したが、「人間による翻訳通訳と比べたらどうですか」と尋ねると、JPA 氏は下記のように語った。

AN18:「通訳(者)、今まで言葉を勉強(してきて)、っていうかね、(自分と)日本語も話してみても、ずっと(一緒に)話してきた中でという経験があるというのはわかるんですねこっちも。なので、その経験があつて、(通訳者は)今まで、変な(訳)、まあ失敗とかはあつたと思うんだけど、そういうのも踏まえての、今の通訳(者)になつてると考えると、それが、見えるというか、そういう感じが分かるので、まだ通訳さん、人間の方が信頼できる。」

この語りのなかで JPA 氏が2回繰り返した「経験」とは、おそらく、通訳者が自身の日本語能力および通訳の能力を発揮して周囲にその能力を証明してきたことや、会社でほかの社員と築き上げた信頼関係を指すと思われる。こういった翻訳通訳者の努力が「見える」、「そういう感じが分かる」、つまり可視であるため、機械翻訳と比べて、翻訳通訳を受ける側にとっては信頼しやすい可能性があることを示唆した。

### 3.2.2 JPB 氏：機械翻訳は補助、責任は自身

JPB 氏の機械翻訳の使用実態に関しては JPA 氏と対照的である。中国語レベルが上級であり、直接自社および取引先の中国人従業員とコミュニケーションをとることができるため、機械翻訳を使用する必要性が比較的低い。とはいえ、前述のように中国語の書類を読む際には、会社として契約している有料の自動翻訳サービス T-tact AN-ZIN® を使用している。JPB 氏はこの機械翻訳サービスを以下のように評価している。

BN1:「ほぼほぼ、8割ぐらい OKっていう感じで、(中国語の)ファイルで(アップロードして翻訳されたものは)英語か日本語で全部書いてあるから、楽ですね。」

BN2:「完璧な文章ではないけど、7割ぐらい (OK) のイメージですね。」

BN3:「(翻訳された文章を)見たら、ああこういうこと言ってるなって、すごい楽で、推測がつくので。」

BN4：「役に立つレベルですね。」

BN5：「インターネットで無料で使えるものより全然レベルは高いですね。」

BN6：「ある程度正しい翻訳をしてくれるなというのかな。」

BN7：「僕だけじゃなくてほかの人，うちの駐在員に聞いてもですね。まあ全然，役に立つね。」

BN8：「さすがに，専門用語はちゃんと翻訳されてないですね。その言葉を見て考える感じですね。」

訳出される文章で「OK」と思う割合を「8割」，「7割」という比較的高い数字を使って評価したり，「役に立つ」，「ある程度正しい」という表現を用いたり，無料の機械翻訳サービスと比べてたりして，JPB氏はこの有料の機械翻訳による訳文の精度および有用性を肯定している。なお，ファイルをアップロードするだけで瞬時に翻訳される「楽」というメリットも言及した。一方で，「完璧な文章ではない」，「ある程度」という一部を否定する表現から，完全に信頼しているわけではないことも示唆している。例えばBN8においては，JPA氏と同様に専門用語に関する訳出の精度に不安があることを表した。そしてBN3において「推測がつく」と語ったように，機械翻訳による訳文をそのまま読んでも完全に理解することはできず，ある程度推測が必要であることを示した。この点においてはJPA氏と同様に訳文を理解する際に工夫をしていることが分かった。さらに，JPA氏が前編集に心を配っているのに対して，JPB氏は後編集に力を注いでいることを示した。

BN9：「(機械翻訳したものをそのまま社外に提出することは) ないですね。そのための，事前に (機械翻訳で) やって，それからもう一回自分でちゃんと構成をしてやるようにしてますね。」

BN10：「(部下には) そのままじゃなくて，ちゃんとそれを見て考えてほしいなと思いますけど。」

BN11：「(機械翻訳の方は) 理解する，資料を理解するためのツール，みたいな。難しい論文とか，中国語で書かれるものを日本語に訳したら楽ですし，英語で書いてるものを中国語にして，(部下に) 『これを読んだらもっと製品のこと分かるよ』(と言う) とか。」

BN12：「補助的な役割で使います。」

BN12で明言したように，JPB氏は機械翻訳を「補助的な役割」と見なし，具体的にはBN11で示したように，「理解」を助けるための「楽」(BN1とBN3にも言及あり)で効率が良い「ツール」として位置付けている。よって，機械翻訳を通じて産出した訳文を「ちゃんと」「見て考えて」，そこにとどまらず「ちゃんと構成」する後編集の作業に注力し，また部下にもこのように要求している。言い換えれば，機械翻訳で産出した文章は，「社外」に出

せるレベルに達する最終的な成果物としては見なさず、手を加えないといけないものであるという態度を表した。その理由について、JPB氏は以下のように語った。

BN13：「仕事でやってる以上は、機械翻訳は翻訳しましたって言ったらそこは基本的な  
いから、社内の責任って言ったら、まあその責任になるけど、仕事にならな  
くなりますね。」

BN14：「会社の責任ですね。出した人の責任ですね。」

BN15：「それで向こうの日本人が見てて、それであなたたちの会社、こんなにスタッ  
フは日本語が使えると言いながら、こんな自動翻訳で返信するんだなって思わ  
れるのが嫌、そっちの方が強いですね。」

BN16：「会社を代表してメールを送ってるから。それでもいいよ、みたいな雰囲気  
世の中に形成されれば別にそれでもいいかもしれない。」

BN17：「仕事なので、それで不利益を被りたくない、ただそれだけです。」

JPB氏が機械翻訳の使用と「仕事」、「責任」、「会社」、「利益」を結びつけて語ったのは興味深い。まず、BN13において「機械翻訳は翻訳しました」こととは言えず、「仕事」にならないという語りから、「仕事」において翻訳をするということは、言葉を単純に変換するのではなく、ちゃんと自分で考えて「ちゃんと構成」(BN9)して、「責任」を持った訳文を産出する必要があるという考え方を示した。こうした責任は、「出した人の責任」であると同時に、「会社を代表」するために会社の責任にもなる。つまり、1人の社員として責任を持って、会社の「不利益」にならないよう行動する必要があるという認識を示した。言い換えれば、機械翻訳による訳文は精度が高いと認めるものの、こうした「責任」を負うことはできない。これはおそらくJPB氏がもつ機械翻訳に対する信頼の線引きと言えるのではないだろうか。さらに、BN16でJPB氏は世間における機械翻訳の訳文に対する許容度はまだ高くないことに言及し、機械翻訳を使用する際には社会的な規範に沿って行動すべきという意識を示した。

一方で、JPB氏は機械翻訳サービスと人間による翻訳、特に翻訳会社へ外注する形式と比較してこう語った。

BN18：「専門の翻訳会社があって、僕らもこっちの翻訳会社に、例えば契約書とかを10  
枚渡して、それをじゃあ、1文字いくらになります、何千元とかみたいって  
やってるんですけど、それ納期っていうか、すぐに出てこないですもんね。2  
日3日とか、特急料金も時々かかるから、それと比べると、(機械翻訳は)ま  
あ信頼できるし、速いし、便利。」

BN19：「契約書とか、そういうレベルならさすがにちゃんときれいに翻訳しないと  
いけないけど、日々のコミュニケーションとか、見積書出しますぐらいだった

ら、別にいいかもしれないね。ファイル見てくださいますか。」

BN20：「費用というよりも速さ、速いですね。」

BN21：「そもそも（翻訳する）人間によるかもしれないですね。一番、僕の会社で日本語が上手い人と、機械翻訳って言ったら僕は絶対その人を選ぶけど、そうじゃない人だったら機械翻訳って場合もありますね。」

JPB氏は、機械翻訳サービスが外注の翻訳サービスより優れている点として納期の速さおよび利便性を挙げた。BN18で「まあ信頼できる」と語ったのも、前述のBN6の「ある程度正しい翻訳をしてくれる」という語りと関連づけられるであろう。ただ、機械翻訳サービスに対して信頼を寄せる一方で、「契約書」のように「きれいに」翻訳される必要があるものや、前述のように社外に提出する書類やメールは「責任」を持った訳文にする必要があるため、機械翻訳によるTTを最終的な成果物とは認定しない。しかし、これで人間による翻訳であれば完全に信頼できるかというところでもなく、BN21で示したように、「人間による」、つまり、その人の日本語能力によって機械翻訳を選んだり選ばなかったりする態度を示し、JPB氏が翻訳の質を重要視していることを暗示したと言えるであろう。

以上に、JPA氏とJPB氏に対するインタビューから、機械翻訳の使用実態を把握し、それを踏まえて機械翻訳に対する信頼に関する語りを抽出し、その内容および語り方について分析した。次章では、第二章で取り上げた先行研究に基づき2名の語りを考察する。

#### 四 考察

本稿のインタビュー調査では、調査協力者を任意に選定したが、2名の協力者は機械翻訳の使用実態において2種類の典型的な形式を代表していると考えられる。また、2名は異なる言語の使用環境に置かれ、異言語間コミュニケーションの相互行為において、異なる社会的・文化的な環境に身を置いている。2名とも自身の経験や社会的なコンテキストに左右されながら、機械翻訳を使用している。本章ではまず、木村（2021）に基づいて2名の異言語間コミュニケーション方略を考察し、そして、機械翻訳に対する信頼の形および機械翻訳の役割を考察する。

6種類の異言語間コミュニケーション方略のうち、JPA氏は方略③機械による「言語仲介」を最も多く採用していることが分かった。これは、JPA氏が自ら選択した方略というより、むしろこの一択に限られる環境に置かれたからである。中国語の能力が十分でないにも関わらず、言語環境が中国語のなかに置かれているという社会的なコンテキストにおいて、JPA氏は機械翻訳による言語仲介方略を最も優先している。その次に多いのは、日本語が話せる

中国人従業員による翻訳通訳に頼ることだが、いずれも間接的なコミュニケーション方略をとっている。また、語りの中で「身振り手振り」について言及し、中国語を学習中という背景から、方略⑥の「受容的多言語使用」も使用していると推測する。JPA氏はインタビューにおいて中国語を積極的に学習している姿勢を示していることから、中国人従業員と直接的なコミュニケーションを目指しており、コミュニケーションを通じて人間関係を構築することを図っていると言えるであろう。JPA氏は機械翻訳を介して中国人従業員とコミュニケーションをとっているが、こうした相互行為において機械翻訳を介したコミュニケーションが成り立つことは、JPA氏と中国人従業員の間の人間関係、信頼関係に基づいているのではないだろうか。

中国における日系企業では、日本語・日本文化・日本式マネジメントが優勢である（西田2007, 朱2021）ものの<sup>5)</sup>、言語の使用環境は必ずしもそうではない。特にJPA氏は、入門レベルの中国語能力で中国語の環境に置かれ、言語の使用環境という観点からは弱い立ち位置に置かれている。しかしながら、インタビューでも言及したようにJPA氏は指示を出す立場であり、現地の従業員の作業方法や品質管理などを日本式マネジメントに近づけようとする立場である。したがって、JPA氏は複雑な社会的コンテキストにおいて機械翻訳を使用している。機械翻訳に対する不安を抱えつつ、前編集といった工夫で一年間試行錯誤を繰り返し、機械翻訳に対して徐々に信頼を蓄積させている。JPA氏は語りの中で、翻訳通訳サービスを使う際、人間であれ機械であれ不安を抱くことを述べ、人間の翻訳通訳に関しては実績に基づいている分、より信頼できると語った。機械翻訳に対する信頼も、こうして実際に使って相手に自分の意図が伝わる経験を繰り返していくことで次第に増していき、JPA氏も機械翻訳という仲介者との相互行為において安心感を得るようになってきていることを示唆した。また、JPA氏は機械翻訳を通じて、指示を出す立場としてほかの中国人従業員と人間関係を構築している。言い換えれば、「正しい翻訳」の産出に関する信頼はともかく、機械翻訳はJPA氏と現地の中国人従業員間の相互行為において仲介の役割を果たすと同時に、人間関係・信頼関係の構築にも肝心の役割を担っている。逆に、JPA氏と中国人従業員とのコミュニケーションにおいて、機械翻訳がこうした役割を遂行できる前提は、互いがそれまでに人間関係・信頼関係を築き上げたことだと言えるであろう。

JPA氏に対してJPB氏は異言語間コミュニケーション方略のうち、基本的な方略②「単一の当事者言語」を選んでしている。これはJPB氏および中国人従業員が言語の学習に時間をかけた結果であり、直接性の面では優れた方略と言える。また、JPB氏の語りにもあったように、JPB氏が置かれている環境は基本的に日本語を使用するため、日本語が優勢言語であり、さらに日本式マネジメントも強い位置を占める環境である。こうした理由もあって、JPB氏は機械翻訳による日本語訳の質を重要視している。JPB氏は機械翻訳の高い精度を認め、信

頼をしながらも、「理解するための訳文」と「社外に出せる最終的な産物」に線を引いている。つまり、最終的に産出するテキストに対して責任を背負うのは、責任が取れる人間（社員）でなければならない。機械翻訳を使用することは、中国語の書類を効率よく理解するためといった、JPB氏が仕事を全うするための補助的手段にとどまっている。これは、JPB氏の言語能力に関係するだけでなく、JPB氏が置かれている社会的なコンテキストにも大きく関連する。機械翻訳に対する許容度、仕事の性質による日本語・日本文化の優位性などのコンテキストはJPB氏の選択、および機械翻訳に対する信頼を左右していると言えるであろう。

チェスタマンが言う信頼の価値は、人間による翻訳通訳行為をめぐって論じたものだが、機械翻訳に通用しないというわけではないと考えられる。本稿は機械翻訳を、翻訳通訳を介するコミュニケーションにおける仲介を担う行為者として見なし、相互作用において機械翻訳は少なくとも翻訳行為の遂行者として作用していると言えるであろう。翻訳サービスを受ける側にとって、翻訳サービスを提供するのが人間であれ、機械であれ、信頼がなければ翻訳行為は実行できない。機械翻訳を使用する人が機械翻訳を信頼するためには、本稿で明らかにしたように、長期使用による信頼の蓄積が必要であり、さらに使用者による工夫、および適切な場面の選定などで産出物を補うことが必要である。また、JPA氏の事例で示したように、機械翻訳を用いるコミュニケーションの成立は当事者間の人間関係・信頼関係に基づくものであり、逆に、機械翻訳はこうした関係の構築に重要な役割を果たしていることを示した。

なお、前述のように、中国の日系企業で日本文化が優勢である理由の一つは、日本人従業員が管理職を務めていることである。興味深いことに、2名とも実際のコミュニケーション例を挙げる際に、「これを使って」、「こうしてください」といった指示を出す表現を取り上げた。日中のビジネス場面での異文化間コミュニケーション摩擦に関する先行研究において、日中の従業員間でコミュニケーション摩擦が最も起こりうる場面の一つはまさに指示場面である（西田 2007, 辻 2011）。また、中国の日系企業に勤務している多くの通訳者は、指示場面でのあいまいな日本語表現を明示化して訳出したり、発話者に確認したりする介入行為を行うことが例証されている（朱 2019, 2021）。つまり、中国の日系企業において、指示場面でのあいまいな日本語表現はコミュニケーション摩擦を起こすため通訳者が間に入って摩擦を起こさないように調整している。機械翻訳を使うと、こういった調整が不可能だが、JPA氏は自身の経験に基づいてあいまいな日本語表現を避けたり、指示を明確にする前編集を行ったりしている。JPB氏も部下の性格や仕事ぶりによって指示の出し方を変えていると語った。こうした機械翻訳でカバーできない領域は、発話者自身で補うしかなく、従業員に対する異文化間教育の重要性を示唆した。

## 五 今後の展開

本稿は、中国の日系企業における異言語間コミュニケーションに注目し、日本人従業員の語りから機械翻訳の使用実態を明らかにした。また、異言語間コミュニケーション方略に基づいて分析して、機械翻訳に対する信頼、および機械翻訳の役割を考察することを試みた。本稿は2名に対してインタビュー調査を実施したが、今後はより多くの日本人従業員、そして中国人従業員、翻訳通訳者にも調査を実施する必要がある。さらに、翻訳通訳を介するコミュニケーションにおいて機械翻訳を行為主体として見なし、人間も物もすべて行為者（アクター）として見なすアクターネットワーク理論の枠組みで分析し、それぞれのアクター間の関係性を見極める研究も機械翻訳の使用増加に伴って重要性が高まっていくであろう。

### 謝辞

年度末のお忙しい中、インタビュー調査に応じてくださった日本人従業員の方々に感謝を申し上げます。

また、いつも丁寧に日本語をチェックしてくださる友人の OY 氏に御礼を申し上げます。

### 注

- 1) ST および、後に言及する TT は翻訳研究の専門用語。ST=Source Text, 主に原文のことを指し、TT=Target Text, 主に訳文のことを指す。
- 2) 本稿を執筆する際、筆者の知り合いの機械翻訳研究者に問い合わせた結果、現在の自動翻訳サービスはすでにニューラル機械翻訳に切り替わった状態であることが分かった。
- 3) 本稿は中国の日系企業における日本人駐在員を研究対象としてインタビューを実施したが、今後は中国人従業員および通訳者にもインタビューを実施する予定であり、それらと区別するために「JP」を前綴りにして「日本人駐在員」とした。
- 4) このサービスは、翻訳・ローカリゼーション会社である株式会社十印が提供しており、NICT（国立研究開発法人情報通信研究機構）で開発した翻訳エンジンで、ニューラルネットワークを用いたニューラル機械翻訳を使用している。前章で述べたように、ニューラル機械翻訳という技術は、自動翻訳の精度を一気に向上させたものである。「T-tact AN-ZIN®」というサービスは、2019年7月からサービスを提供開始し、活用分野を「汎用、リーガル、特許、特許請求項、半導体、金融」などとしている。（株式会社十印、NICT のホームページによる）  
[https://gcp.nict.go.jp/news/products\\_and\\_services\\_GCP.pdf](https://gcp.nict.go.jp/news/products_and_services_GCP.pdf)  
<https://to-in.com/lp>  
最終閲覧：2024年3月26日。
- 5) あくまで西田（2007）、朱（2021）における調査の時点と言えることである。日本は2022年3月をもって中国に対する ODA 事業（政府開発援助）を終了した。その後、中国の日系企業に

おける従業員の意識がいかに変化しているのかに関する研究はまだ見られないが、本稿での研究に限って言うと、まだこうした傾向が見られるのではないかと考えられる。

## 参考文献

- Chesterman, A. (1997). *Memes of Translation: The Spread of Ideas in Translation*. Amsterdam: John Benjamins.
- 木村護郎クリストフ (2021). 『異言語間コミュニケーションの方法—媒介言語をめぐる議論と実際—』. 大修館書店.
- 黒橋禎夫 (2022). 「機械翻訳技術の現在と未来」(講演概要). 『ことばと社会—転換期の大学言語教育—』. 24号. 三元社. pp. 37-42.
- 村上公一 (2023). 「モバイル端末・インターネット・機械翻訳—異言語間コミュニケーション手段の変容と外国語教育—」. 愛知大学現代中国学会(編)『中国21』. Vol. 58. pp. 31-47.
- 西田ひろ子 (2007). 『米国, 中国進出日系企業における異文化間コミュニケーション摩擦』. 風間書房.
- ピム A. 武田珂代子 (訳) (2010). 『翻訳理論の探求』. みすゞ書房. [原著: Pym, A. (2010). *Exploring Translation Theories*. London/New York: Routledge.]
- 田畑文也 (2017). 「ニューラル翻訳を用いた中国特許機械翻訳精度の検証—中国特許の日本語及び英語への機械翻訳精度の検証—」. 『一般社団法人 情報科学技術協会 第14回情報プロフェッショナルシンポジウム予稿集』.
- Toury, G. (1995). *Descriptive translation studies and beyond*. Amsterdam/ Philadelphia: Routledge.
- 辻周吾 (2011). 「中国進出日系企業における日本語コミュニケーション教育—日本人駐在員の使用する「注意表現」, 「指示表現」, 「断り表現」, 「称賛表現」の在り方—」. 『スピーチ・コミュニケーション教育』. 24. pp. 61-82.
- 山田優 (2022). 「機械翻訳と翻訳のメタ言語」. 泉水浩隆(編)『翻訳と通訳の過去・現在・未来—多言語と多文化を結んで—』. 三修社. pp. 315-338.
- 朱藹琳 (2019). 「コミュニケーション摩擦場面における通訳者の規範意識—中国の日系企業を中心に—」. 『通訳翻訳研究への招待』. Vol. 20. pp. 115-140.
- 朱藹琳 (2021). 「通訳者はいかにコミュニケーション摩擦に関与するか—中国の日系企業における社内通訳者の実例分析を通じて—」. 『通訳翻訳研究』. 20. pp. 41-65.
- 朱藹琳 (2022). 「コミュニケーション摩擦場面から見た通訳者の倫理—中国の日系企業における社内通訳者を中心に—」. 神戸大学大学院国際文化学研究科博士論文.